

米原歴史街道

米原市の歴史・文化財を歩く 80

慈芳 (百如さん)

— まいばらの先人② —

独特の書画

能登瀨には、信仰上の和歌や法話の讃を入れた、灰色に近い淡墨で描かれた書画が残されていて、これを床の間や居間などに飾ると「火災災難除けのまじないになる」といわれています。湖北一円に数多く残っているこの書画は、江戸時代中頃に能登瀨で生まれた慈芳というお坊さんのものです。地元では「百如さん」として親しまれています。独特の淡墨の画風は、沖縄や台湾製の熱帯アジア性植物「阿檀木」の新芽からとれる毛のような繊維をたたき束ねて筆とし、墨代わりに山の中の青黒い粘土を使ったことで生まれしました。これは、殺生を嫌う慈芳の、動物の毛から作る筆や、骨から採ったニカワを使用する墨を使わずにすむ工夫でした。

慈芳は、享保一六年（一七三二）

に能登瀨の嶋清五郎秀光の次男として生まれしました。嶋家は戦国武将嶋若狭守の子孫です。法名を南樂坊、別に仙山、百如ともいいますが、実名は不明です。延享七年（一七五九）、一五歳で比叡山に登り、東塔善光院の観回慈門の門下に入りました。嶋家は代々成菩提院（柏原／天台宗）との結びつきがあり、父秀光が我が子の生涯を成菩提院に託したものと考えられます。その後、横川南樂坊に移り住み、戒律（仏教で守らなくてはならない道徳規範や規則）の実践をめざす律学道場安樂律院で学びますが、思想上の対立から一時除籍され、江戸に赴きました。帰山を許されたのちは、安樂律院の寂音和尚から八戒をうけ、天明九年（一七八一）には二五〇の具足戒を受けて比丘（出家して一定の戒をうけた男僧）となりました。

能登瀨に帰る

波乱にとんだ半生のなかで、何度か故郷の能登瀨に帰り、安永七年（一七七八）には、天野川河畔にある石見山とよばれる風光明媚な田園中の小丘を「千界山」と命名し、「百如庵」という庵を結びました。四八歳のときです。文化七年（一八〇四）、七四歳で京都で没するまで、ここを湖北一帯の律学道場として布教につとめました。

慈芳には、百如庵で執筆したと思われる多くの著書や書画、和歌が残されています。とくに悉曇学（梵字・音声に関する学問）にすぐれています。また、国文学にも長じ、詩歌も巧みで、「千界山百首和歌」を寛政二年（一七九〇）に撰し、郷里の風物を描写した和歌には慈芳の心の暖かき、やさしさがにじみ出ています。百如庵での生活の一端は、慈芳がつづった『山簀目録』で知ることができます。山簀は山菜を入れる竹かごのことで、律僧として殺生の禁を守り続けて山菜を丘やその周辺に求め、食料とした慈芳の姿が浮かんできます。麻衣に草履姿、一日一食、香を焚き、経を誦み、厳しい行に明け暮れる毎日でした。「念仏九万

遍、光明真言五万遍、文殊五字呪三万遍」などの文字が見えます。さらに慈芳は土木工事にも精通していました。カブト山に水源を持ち、能登瀨で天野川に合流する長老墓地川は、すぐに氾濫し、橋が流され里人が難渋するのに忍びず、石柱を立てて橋脚として桁を渡し、その上に板を張って橋としました。以後、上部が流れても橋脚は残り、架け替えが容易になりました。この石橋は、いまでも大切に保管されています。

（歴史・文化財保護室）



▲ 長老墓地川の石橋